



タイのバンコクから飛行機で3時間半、フィリピンの玄関口であるニノイ・アキノ国際空港に着いた。

岐阜信用金庫がフィリピンの大手銀行メトロポリタン銀行と業務提携をした2014年以来、10年ぶりにマニラ首都圏を訪れた。テロなど犯罪の未然防止のため、空港はもちろんのこと、ホテルでも実施されている手荷物検査や空港からマニラ中心部に向かう交通渋滞は10年前と変わっていない。

大きく変化を見せたのは、マニラ南東にあるマカティ市。道路にはごみ一つなく、バンコクで見かける物乞いの姿もない。犯罪と格差社会のイメージが強いフィリピンであるが、外資系企業が集積し、高層ビルが立ち並ぶ「フィリピン

外資系が集積、新都心に

フィリピンのマカティ市

のウォール街」と呼ばれる新都心へと変わっていた。

早朝のマカティの街を散歩した。大型ショッピングモールは若者でにぎわい、その隣には地方行きのバスターミナルがある。教会や有名なホテルも点在していた。多くの人をマカティへ招き入れている。

もう一つ大きく変わったのは日本食。10年前に化学調味料と硬い天ぷらが入ったうどんを食べたことを覚えている。今回のフィリピン訪問で、マニラから西へ170

キ離れたスービック経済特区や、マニラから南へ100キ離れたバタンガス工業団地でも、格段においしくなったうどんを食べることができた。



高層ビルが立ち並ぶマカティ市



日本料理店の店内の様子
フィリピン、バタンガス州

現地の飲食店で長く働く日本人が「フィリピン人が日本を訪ね、日本食を味わってからは、フィリピンでも本物の日本食を提供することができるようになった」と教えてくれた。フィリピン人だけでなく中国、インドからのビジネスマンでにぎわう日本料理店の様子を見て、日本食は立派な文化として根付いていることを再認識した。

10年前のフィリピンの人口は9900万人であったが、24年は1億1400万人に増加した。平均年齢も日本の48歳に対し、フィリピンは26歳と非常に若い。労働力が豊富で、中間所得層も増加しており、経済発展も著しい。今後の10年で、犯罪や格差社会といった負のイメージが払拭され、フィリピンが日本の良きビジネスパートナーとなり、日本文化が一層浸透していくことを期待したい。(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所 長 高橋英孝)